

品川郷土の会 会報

令和6年(2024)1月

復刊第140号

発行人 浦山嗣雄

編集人 野口健夫

令和6年総会開催

1月26日午後中小企業センター小会議室で12名が参加し開催。今回参加者の全員賛同を得て下記議案が決定・承認された。

議題一 令和5年会計報告内容

前年度繰越金 245411円

令和5年收入 102502円

令和5年支出 109917円

単年度収支 ▲7415円

次年度繰越金 207996円

寄付金を含めても単年度は赤字でしたが上記内容で承認されました。

議題二 坂本道夫氏の会長退任の件

2012年7月に就任した坂本会長より身体上の理由で退任の申出があり承認された。

議題三 坂本道夫氏の名誉会長就任の件

前土屋会長の例に倣い承認されました。

議題四 新会長選任の件

参加者全員の推挙で、浦山嗣雄相談役の会長就任が決定しました。

議題五 副会長野村脩氏を監査担当に

選任する件

規約上選任することになっていながら、空席となっていた監査を野村副会長が担当することに決定しました。



浦山嗣雄新会長

浦山嗣雄新会長挨拶

只今、新会長に選任された浦山です。私も卒寿になり、現在も色々な役職を兼任しています。土屋会長時代から荏原七福神などでは品川郷土の会と関わりがあり思い出もあります。創始した土屋氏、先代坂本氏が永年の間、会長として尽力し存続してきた、由緒ある本会に微力ながら、私なりにお手伝いできればという思いで、後任が決まるまでの間、会長職を引き受けしました。

私は私なりに会長職を務めますので、従前同様、皆様のご協力をお願いいたします。

第 482 回例会開催

総会終了後、引き続き第 482 回例会を開催しました。下記講演の外、野口副会長から、NHK テレビ放映内容、大井第一地域センター 支え愛サロン講演の内容説明や、関係団体主催イベントの紹介がありました。



地名考

副会長 野口 健夫

昭和 37 年(1962 年)、自治省の方針に従い、品川区でも昭和 39 年(1964 年)地名変更が行われ、昔の字名はほぼ消失した。北品川、東品川、西品川、南品川とか大井、東大井、西大井、南大井…のように地域の大字、小字を無視した無味乾燥、機械的な命名である。大井に限れば、大井村内の番地に重複はなく旧来の番地表記でなんら問題はなかったはずである。



野口副会長

当時の技術水準での事務合理化を目的にしたが、現在の手書き入力でも容易になった技術レベルで考えれば、あの大袈裟な改

革は大して意味のない合理化と言えよう。

私などは、60 年近くたった今でも字名で言

われれば分かるが何丁目何番地と言われてもピンとこないほど、字名が染みついたまま鬼籍入りしようとしています。

以前、『蛇窪』は、縁起が悪いと一旦消失し蛇窪歯科医院程度でしか存続しなかった。ある時、巳年にあやかるブームが起こり、上神明天祖神社は、わざわざ通称「蛇窪神社」とされ復活した例もある。地域の歴史には無関係で人為的な『豊町』とか『二葉町』より旧態をなぞって命名された『蛇窪』も決して悪くないということであろう。『大間窪』は『大井町』と『蛇窪』の間という地名だそうだから、蛇窪消失時に消えそうなものだが、最近まで学校名として存続した。

近所に、『西大井二丁目』と『大井原町』という東急バスの停留所がある。前者は現状表記、後者は旧態表記で、同一地区を示し、昔から住む、私などには滑稽に感じるのだが、新人には違和感はないようである。因みに『西大井二丁目』は旧名『大井原町』、『大井原町』は旧名『原小学校前』だった。原小学校が伊藤中学校と統合され伊藤学園となり廃校になったための東急バスの苦肉の策であろう。

『狐窪』と『谷垂』を統合し『伊藤町』に変更提案したのは、近隣の有力者だったそうだが、それも今では『西大井 5 丁目』『西大井 6 丁目』と昔の字に分離され、伊藤公墓所とは無関係な地名になった。

最近、頻発する地震災害を考えると、地形を模して命名されることが多かった旧地名はがけ崩れ、液状化、出水など災害防止を考えるうえでも参考になりそうである。『…新田』、『…新開地』、『…島』は江戸期以降に埋め立てられた場所だから、地震で液状化は避けられない程度の情報は地名が提供してくれる。

取り留めのない話になったが、民俗学者

谷川健一氏の1997年(平成7年)4月発刊「日本の地名」の結語にこのような一文がある。『地名の改竄は歴史の改竄につながる。それは地名を通じて永年培われた日本人の共同感情の抹殺であり、日本の伝統に対する挑戦である。』。なかなか的確な論調だと個人的には感じる。たかが地名研究だが、本例で観ても、興味深く奥の深いものだと改めて感じる次第である。



浜川小学校、午後5時限目の授業(3クラス)

鮫浜小・浜川小 坂本龍馬 出前授業

高知県坂本龍馬記念館三浦学芸員を招いた、坂本龍馬出前授業が昨年に引き続き今年も12月22日(金)に実施されました。

○ 対象校と開催時間：

鮫浜小学校 10:40～11:25

浜川小学校 14:15～15:00

○ 担当講師：

1.坂本龍馬記念館

チーフ(学芸担当) 三浦 夏樹 氏

① 紙芝居 龍馬風になれ

② 坂本龍馬伝

2.しながわ花海道理事 野口 健夫

① 浜川地域と坂本龍馬



鮫浜小学校、午前3時限目の授業(1クラス)

第10回 品川蕪品評会

2008年に発足し、第10回を迎えた江戸野菜 品川蕪(しながわかぶ)の品評会が12月24日(日)品川神社境内で実施されました。出展者は20組で金賞は台場小学校、銀賞は出雲小学校、銅賞は灰田さん、特別賞は品川学園が受賞しました。審査員は、森澤恭子品川区長、大竹道茂江戸伝統野菜研究会会長など5名で行いました。なお、現在、JA東京が認定している江戸東京野菜に品川区では品川蕪、品川葱、居留木橋南瓜、戸越筍の4種類の野菜が入っています。



出展した20団体・個人

大井第一地区 第5回支え愛サロン

大井にある饅頭の碑

～日本の饅頭ものがたり～

品川郷土の会 副会長 野口 健夫

大井第一地区支え愛活動会議が主催して1月24日、南大井文化センター第一会議室において60名が参加して開催されました。

一方的な講演会でなくサロンですから、お茶を飲み、菓子をつまみながら話を聞く、気楽なイベントでした。地元の東大井・来福寺に関係した話や身近な和菓子饅頭談義なので関心を持たれた方が多かったようです。



支え愛サロン会場風景



講演風景

御料車庫跡地工事現況

段々全貌が分かるようになりました。東側壁の一部はモニュメント的に残すような、工事の進捗です。壁の区役所側(西側)は建物のない広場のようですが、どうでしょう。



1月23日現在

最近話題の東海道筋の食事処

最近、旧東海道沿いの下記2店舗がTBSテレビ、テレビ東京、日本テレビなどで放映され、YouTube, Instagram, TikTokなどで視聴回数が増加、情報が拡散しています。この影響で、最近は従来と異なり若年層の女性陣が連日押し寄せています。単価の比較的安いランチタイムは吉田家の場合、事前予約しても小一時間は待たされます。入舟はかつての小料理屋から洋食屋に替わった店で、天使のアジフライが有名ですが、片桐はいりさんお気に入りのポテトスープや大海老フライも人気だそうです。



東大井 2-15-13 蕎麦会席 吉田家



南大井 3-18-5 洋食 入舟

関東大震災 100 年と黒澤明

黒澤明監督は1910年(明治43)3月23日、東大井の現区立浜川中学校の場所にあった、父親黒澤勇が勤めていた、日本体育会附属中学校の職員官舎で生誕しています。父親の事情で1917年(大正6)職員社宅を退去し、小石川区西江戸川町(現・文京区水道一丁目)に転居し裕福だった生活が暗転します。兄は活動弁士の須田貞明で、1923年(大正12)9月1日関東大震災発生時兄に連れられて、悲惨な状況を目撃したことが自伝に綴られています。9月2日(再放送12月12日)のNHKの関東大震災100年特集でこれが紹介

されました。この時の経験が後の黒澤映画に大きな影響を与えたといえます。



黒澤明の手記より
「川に漂っている屍体(したい)。橋の上に折り重なっている屍体。ありとあらゆる人間の死にざまを私は見た。特に、赤く染まった隅田川の岸に立ち、打ち寄せる死骸の群を眺めたときは、膝の力が抜けてへなへたと倒れそうになった。生きているのは兄と私の二人だけだった。いや、二人とももう死んで、地獄の入口に立っているのだ。そんな気もした」
(「蝦蟇の油 自伝のようなもの」/黒澤明)

※この本は東大井区民集会所に展示されています

現代日本人のルーツ最新情報

最近の文献や報道をまとめてみました。縄文人はアフリカを出た後、アジアへ向かった集団の南東集団が北上し氷河期終了後島弧に孤立した集団と考えられ、当初の集団はDNA分析で1000人程度とされています。従来は日本人のルーツとして、縄文人と弥生人の二層構造説が主流でしたが、最近の研究結果で三層構造説が有力になってきました。最近の分析で縄文人に由来するDNAの比率は、

現代日本人(東京)	10%
沖縄人	30%
アイヌ人	60%

と報告されています。

また、最近の人骨 DNA 解析結果によると、現代日本人 DNA の由来構成は概ね、

10%	縄文人由来
15%	弥生人(北東アジア渡来人)由来
75%	南東アジア渡来人由来

で、三層構造を裏付けています。

弥生時代に中国北部から一定数渡来した後、古墳時代以降に弥生時代を上回る弥生時代と異なる政情変動の激しかった中国南部や南東アジアから弥生時代を上回る、大量の渡来集団が居たことを物語っています。この時代の人種の多様化は現在以上と考えられます。この影響は中世まで続いていた可能性があり、更に研究が進めば詳細が解明されるでしょう。

城南ふれあいフォーラム 第12回 呑川の歴史から学ぶ城南の都市河川

日時：2月10日(土)13時半～

会場：東工大 蔵前会館ロイヤルホール

参加費：500円

申込先：JIA 城南地域会 事務局

メール：jia2007johnan@gmail.com

トーク：JIA 城南地域会、呑川の会、大田区河川担当、品川区河川担当など

なお、これは講演会でなくフォーラムですから参加者は自由に討議に参加することができ、行政関係者に提言、苦言を述べることもできます。品川郷土の会では、過去に浜川から西小山間の立会川流域調査の際協力した経緯があります。

当会に関連した催し情報

世田谷区誌研究会 令和6年講演会予定

- 2月15日 徳川家光と反骨の禅僧沢庵宗彭
(講師 柘植信行氏)
- 4月16日 武蔵野と多摩丘陵に出土した
飛鳥キトラ文化(講師 宮田太郎氏)
- 5月16日 孝明天皇と幕末政治史
(講師 伊藤 寿氏)
- 6月20日 演題未定(講師 谷口 榮氏)
- 10月17日 江戸幕府と日露外交
(講師 伊藤 寿氏)

問合せ：kushiken0817@yahoo.co.jp

TEL 080-3727-0817 会長 野岸敏雄

第18回 品川宿史談会 講演会 江戸遊里の大関格品川と深川 —洒落本を中心に繁栄の様相を見る—

講師：立教大学名誉教授 渡辺憲司氏
主な著作

いのりの海へ 婦人之友社 2018年3月

江戸遊里の記憶 ゆまに書房 2017年6月

読んでおきたい…25 旺文社 2015年3月

江戸遊女紀聞 ゆまに書房 2013年1月

日時：2月18日(日)14時～

場所：品川区第一地域センター2階会議室

定員：60名(先着順)

会費：1000円

申込：品川宿交流館または090-6198-8975まで

主催：品川宿史談会

北品川 1-23-6 第一建物マンション3階

郷土・郷土史関連図書情報

品川区内地域や郷土史に関連した図書を紹介します。興味のある方は、書店等で入手するか、近くの図書館などで閲覧下さい。

1. 東京の江戸めぐりさんぽ

本書では、江戸名所図絵・古地図と現在の写真や地図で当時と現代の景色と暮らしが分かるように構成している。江戸の名所が今現在どのようになっているのか、また、江戸時代の名残の調べ方が、この本を読めば分かるようになっている。江戸のにぎわいの中心だった神田、日本橋、宿場街であった新宿、品川、千住といった街の見方から、各地域に今も残る神社仏閣、橋などの建築物、当時の面影が色濃く残る隅田、神田、玉川上水といった川辺まで、しながわ関連では、定番の品川宿、品川獺師町、荏原神社、品川神社を取り上げています。

著 者：岡本 哲志
発 行：エクスマレッジ
判 型：四六版
頁 数：172 頁
価 格：1870 円(税込)
発売日：2023 年 11 月 16 日
ISBN：978-4-7678-3205-0

2. 東京暗渠学 改訂版

今から百年前まで、東京には無数の川や上水路・用水路、運河や堀割があった。それらの大部分は失われたが、いまなおその存在感を漂わせているところも多い。本書は、暗渠（ここでは、流路の痕跡を含めてそ

う呼ぶ)を歩く形で紹介しながら、それぞれの暗渠に空間・時間・景観の三つの軸からアプローチして、体系的にその姿をひもといていく暗渠学の専門家本田創氏の最新版。今回の改定で90cm×60cmの、大正時代の地形図に現在の暗渠を重ねた地図と土地の傾斜がわかる「傾斜量図」と暗渠の重ね地図が付属されている。立会川に関して、章立てされ詳しく解説されている。

著 者 本田 創
出版社 実業の日本社
価 格 2860 円(税込)
頁 数 256 頁
発売日 2023 年 11 月 23 日
判 型 A5 版
ISBN 978-4-408-65057-9

3. 東京奇譚集

品川を冠した『品川猿』が収録されている。2005年に相次いで書かれた5つの短篇を収録。タイトルの「奇譚」は、たしかにそうでないことはないのだが、最後の「品川猿」を例外として、むしろ現代アメリカ文学の翻訳のような短編小説です。物語の奇譚度は、概ね収録の順で上がって行く。どれも、しみりとした風情の実に味わい深い物語だ。最近、また平置きされるようになりました。

著 者 村上 春樹
出版社 新潮社
判 型 文庫版
出版年月 2020 年 12 月 18 日
ISBN 978-4103534181
頁 数 196 頁
価 格 572 円 (税込)

4. 東京・横浜激動の幕末明治

横浜は日米和親条約の締結地として、嘉永7年(1854年)、表舞台に登場する。安政6年(1859年)の横浜開港後、攘夷運動が高まり、次第に江戸幕府の弱体化が顕著となる。転換点となる江戸城総攻撃の中止には横浜の外交団の力が大きく与かっていた。明治に入り両都市の距離が縮まることで、横浜・東京の近代化も加速していく。東京築港論争を経て、横浜が貿易港になり、両都市の関係史、比較史視点で読み解いていく。経過の話題として坂本龍馬が取り上げられ、品川台場、御殿山下鉄道の話が出ている。

著者 安藤 優一郎

出版社 有隣堂

判型 新書版

出版年月 2023年12月8日

ISBN 978-4-8966-0245-6

頁数 216頁

価格 1210円(税込)

当会の関連行事について

品川郷土の会

第483回例会お知らせ

第483回例会の詳細は未定ですが、ご希望のテーマや分野があればご連絡ください。検討したいと思います。出欠確認は、ご希望などを鑑み、追って往復はがきで、ご案内いたします。

(復刊140号おわり)

品川郷土の会や本誌についてのお問合せは、

〒140-0015 品川区西大井2-22-18

Pete.nog@arrow.ocn.ne.jp 野口まで